

柳得恭手稿本『燕臺再游録』から見た冊封使李鼎元の 琉球認識と清・琉球・日本・朝鮮四国の国際関係

木 村 可 奈 子

はじめに

一六〇九年の島津氏による琉球侵攻により、琉球が王国体制を維持したまま日本の幕藩制国家の一部となり、その一方、明清中国から冊封を受け続け、琉球処分による沖縄県の設置まで幕藩体制のなかの「異国」として存続したことについては、すでに周知のとおりである。琉球は日本の間接的な支配を受けていることを中国に対して隠蔽し、従順な冊封国として振舞うことで日本の中国貿易の窓口のひとつとして機能し、王国を保った。^①

琉球は中国から冊封使がやってくると、日本の存在を悟られぬように努めた。また、中国に琉球人が漂着した際に思いがけず日本との関係が発覚することがないように、漂流した際のマニュアルを作って守らせ、清人や朝鮮人が琉球に漂着した際も、漂流民を

隔離するなどして日本との関係が露見しないよう努めた。薩摩側も隠蔽に努め、薩摩人と琉球人が同乗した船が清に漂着した場合^②は、琉球人に月代を剃らせ、日本人に変装させて関係を隠蔽させた。

しかし、このような琉球や薩摩藩の努力にも関わらず、琉球と同じく明清中国から冊封を受けていた朝鮮は、琉球が日本に属していることを知っていた。中国が清朝になってから、朝鮮と琉球の通信関係は杜絶していたが、朝鮮は日本と通信関係を持つており、日本での見聞や、知識人・幕府要人とのやり取りの中で、琉球が日本に属していることを把握していた。^④

一方清では、琉球と日本との関係が露見して国際問題になることは無かった。琉球にやってきた冊封使は日本の支配実態に感じていたが、琉球に説明を求めず、朝廷には琉球国王の恭順ぶり

のみ報告した。^⑤

近年、当時の国際関係が全体的にどのような構造を持っていたかを問題にして朝鮮と琉球の関係を検討した夫馬進氏は、一六〇九年の島津氏による琉球侵攻以降、中国と日本が直接外交関係をもたない事が、中国と日本に服属していた琉球の間で冊封関係を成立させることを可能にし、一方朝鮮は日本と通信関係を回復し、琉球が日本の服属下にあることを知っていたため、琉球と国交を杜絶せざるをえなかったとの説を提示した。夫馬氏は、朝貢シテム論や冊封体制論に影響を受けた議論が、日本が東アジアの国際秩序から離脱していたと論じているが、実際には逆に、中国と日本の国交の杜絶こそが、当時の清・琉球・日本・朝鮮という東アジアの四国の間の安定した国際秩序を形成させていたことを指摘し、特に西嶋定生氏の冊封体制論を批判した。^⑥

夫馬氏はこの議論の中で、琉球が明末から日本に臣属したままであることは、清朝の康熙二十年代にはすでに忘れ去られていたが、冊封使や考証学者の一部はうすうす知りうるものがあつたものの、公言したりあからさまに人に問うてはならなかったとした。その一例として挙げるのが、嘉慶五年（一八〇〇）の冊封副使李鼎元である。

考証学全盛の時代を生きる知識人であつた李鼎元は、その使琉

球録である『使琉球記』の中で日本年号の書かれた那覇の波上寺銘文^⑦を考証し、明末に琉球が日本に臣属していたという結論に至つた。ところが、琉球がいつからどのようにして日本の臣属から離れたのか、一切考証しなかつた。夫馬氏は、彼が判断を停止してそれ以上は問わなかつたとした。なぜなら、清朝皇帝は、琉球は日本に臣属していないとして朝貢を受けつけ冊封し、乾隆帝にいたっては乾隆二十一年（一七五六）の冊封使である周煌に『琉球国志略』を編纂させ、琉球を中国の一省なみに見なした地方志を作らせていたため、琉球と日本の関係を公言することは皇帝の顔に泥を塗ることであつた。また、東アジアではすでに安定した国際秩序が成り立っており、一歩間違えれば著しい不敬と秩序破壊を招くことであつた。そのため、中国の冊封使や考証学者が琉球の置かれている現状を知つたとしても、それを公言したり、それ以上問うてはいけなかつたと結論した。^⑧

夫馬氏がこのように述べる根拠の一つが、李鼎元が冊封使行からの帰国直後である嘉慶六年（一八〇一）に、旧知の朝鮮人であり、燕行使としてやってきていた柳得恭と行つた問答で、以下のようなやりとりを行いながらも、現在琉球が日本に臣属しているのか直接的に問わず、問答がかみ合わずに終わっていることである。^⑨

墨莊（李鼎元）「貴邦はかつて琉球と通商していましたが、後に間隙ができました。今は結局のところどうなのでしょう。」

余（柳得恭）「国初はかれ（琉球）は来貢していました。今は来ていません。別に不和はありません。」

墨莊「片田舎にあつて小さく、笑うべきです。」

余「万曆中、平秀吉がその国の王を捕らえ連れ去りました。」^⑩

この問答は柳得恭の燕行録『燕臺再游録』によるものであるが、夫馬氏は、中国の歴史家金毓黻が編集し、鉛印出版した『遼海叢書』所収の『燕臺再游録』^⑪に基づいて論じている。しかし筆者がこのテキストと、現存する諸鈔本を比較した結果、多くの誤字・脱字・脱文がある非常に問題の多いテキストであることが判明した。^⑫特に、前述の李鼎元と柳得恭のやり取りの部分では、柳得恭の自筆稿本をはじめとする現存する諸本と比べると、李鼎元の琉球認識を知る上で決定的な部分が失われている。

そのため、本稿では柳得恭の手稿本『燕臺再游録』を用いて柳得恭と李鼎元の問答を分析することで、冊封使李鼎元の琉球に対する認識と、当時の清・琉球・日本・朝鮮という東アジアにある四国の国際関係が、それぞれお互いどのように影響していたのかについてその一端を明らかにし、四国の国際関係を構造的に考え

るひとつの手がかりとしたい。

- ① 紙屋敦之『幕藩制国家の琉球支配』（校倉書房、一九九〇年）、同著者『東アジアの中の琉球と薩摩藩』（校倉書房、二〇一三年）等参照。
- ② 詳細は、渡辺美季「清に対する琉日関係の隠蔽と漂着問題」（『近世琉球と中日関係』、吉川弘文館、二〇二二年、初出二〇〇五年）参照。
- ③ 詳細は夫馬進「二六〇九年、日本の琉球併合以降における中国・朝鮮の対琉球外交——東アジア四国における冊封、朝貢そして杜絶——」（『朝鮮燕行使と朝鮮通信使』、名古屋大学出版会、二〇一五年、初出二〇〇八年）参照。
- ④ 詳細は註③夫馬著書所収「朝鮮知識人による琉球の国際的地位認識——北学派を中心に——」（初出二〇一三年）参照。
- ⑤ 赤嶺守『琉球王国 東アジアのコーナーストーン』、講談社、二〇〇四年、一三四—一三五頁参照。
- ⑥ 詳細は、註③夫馬論考参照。
- ⑦ 詳細は二章二節で後述する。
- ⑧ 註③夫馬論考、一一四—一一七頁、および夫馬進「増訂版によせて」（同編『増訂使琉球録解題及び研究』、榕樹書林、一九九九年）iv—ix頁参照。
- ⑨ 註③夫馬論文、一一七頁。
- ⑩ 墨莊曰「貴邦曾與琉球通商、後成隙。今究如何。」余曰「國初伊來貢。今不來。別無嫌隙。」墨莊曰「僻小可笑。」余曰「萬曆中、平秀吉挈他國王去。」
- ⑪ 『遼海叢書』第一集（大連、遼海書社、一九三四年）所収。
- ⑫ 筆者手稿本をはじめとする『燕臺再游録』諸本の関係と、遼海叢書本の問題点については、稿を改めて論じる。
- ⑬ 東アジアという範囲がどこまでであるかは、論者によって様々であ

る。本稿は註③夫馬論考で検討された清・琉球・日本・朝鮮という四国の関係を問題の対象とする。夫馬氏はこの四国は東アジアの全体ではなく一部分として認識しているが、筆者もその見解に同意する。

第一章 柳得恭と李鼎元

一、『燕臺再游録』の基本情報

まずは、『燕臺再游録』とはどのような史料なのかを確認したい。著者は柳得恭、字は恵風・恵甫、号は冷齋・歌商樓・古芸堂・古芸居士等がある。「北の方中国に学」ぶことを主張した実学一派である北学派の一人である。また詩人としても有名で、同じ北学派の李德懋・朴齊家・李書九とともに「四家詩人」と称される。柳得恭が初めて清の地を踏むのは、一七七八年に瀋陽に行幸した乾隆帝への問安使の一行に参加した際のことであった。

この際に『挹婁旅筆』を書いたとされるが、現存しない。柳得恭は庶孽故に官吏登用差別を受けていたが、一七七九年におなじく庶孽出身の李德懋・朴齊家・徐理修とともに正祖の特命で奎章閣の初代検書官に拔擢され、政策諮問役となる。一七九〇年に進賀兼謝恩使の一行に朴齊家とともに参加して初めて北京に燕行し、『灤陽録』（別名『熱河紀行詩注』^①）を書く。

そして今回取り上げる『燕臺再游録』は、一八〇一年に朱子の著述の善本購入任務のために謝恩使に伴って燕行した際の記録である。この際の燕行には、朴齊家も参加していた。正月二八日に燕行の命を受け、二月一五日に出発し、四月一日到北京に到着、六月三〇日に漢城に帰京している。本書は日記体ではなく、ほとんどが交流した人物とのやり取りごとにまとめられているため、詳細な時系列は不明な部分が多い。

二、柳得恭と李鼎元の交友

ついで、柳得恭と李鼎元の交友の経緯を確認したい。李鼎元は字を和叔・味堂、号を墨莊・師竹斎といい、四川省綿州羅江縣の人である。乾隆四三年（一七七八）の進士で、翰林院庶吉士、翰林院檢討となり、検討時代には清朝の一大国家事業である四庫全書の編纂に分校官として参与した^③。内閣中書であった嘉慶四年（一七九九）に琉球冊封の副使に任命される。従兄李調元（乾隆二八年の進士・号雨村）・弟李驥元（乾隆四九年の進士・号虎塘）とともに詩に優れ、「綿州の三李」と称された。現存する著作に『師竹斎集』一四卷、『使琉球記』六卷がある^④。

彼は柳得恭をはじめとする多くの朝鮮人士と交流を持ったが、その契機となったのが、従兄李調元と、柳得恭の叔父柳琴の出会い

いである。柳琴は柳得恭等四人の詩才を認め、彼等の詩を編纂して『巾衍集』と名づけ、乾隆四一年（一七七六）一月に漢城を出発した進賀兼謝恩使に随行した際にこれを持参し、清人に序文を依頼しようとした。たまたま琉璃廠の書肆にて吏部員外郎李調元の『粵東皇華集』を読みその詩才を認めた柳琴は、年が明けて正月に紹介状もなく彼の家を突然訪ね、『巾衍集』の序文を依頼した。服装も異なり、言葉も通じない外国人の訪問に驚いた李調元であったが、筆談を通して彼が朝賀のためにやってきた朝鮮使節であることを知ってその訪問を喜び、直ちに序文を書いた。その中で、柳得恭等を「四家」と称したことが、後に彼等が「四家詩人」と呼ばれる契機となった。そして彼は友人の潘庭筠にも送って序文を書かせ、全ての詩に詳細な評を付した。柳琴はまたこの際李鼎元とも知り合い、交流を深めた。^⑦

その翌年の乾隆四三年（一七七八）に、李德懋と朴齊家は燕行使節に随行して北京に行く。当時李調元は広東学政として地方に出ており北京には居なかったが、丁度進士に合格し庶吉士に任じられていた李鼎元及び潘庭筠と頻繁に筆談を行い、交友を深めた。また、李鼎元の弟李驥元や李調元の幼馴染の唐樂宇、詩人祝徳麟、金石学者沈心醇などと交流し、琉璃廠に通って訪書に力をいれた。今回の燕行に際し、李德懋と朴齊家は柳得恭の『二十一都懷古

詩』を持参していたが、これを読んだ潘庭筠は激賞し、李鼎元は詩を題した。^⑧朴齊家は帰国すると、直ちに燕行の経験をもとに『北学議』を書いて朝鮮の制度改革、技術改革の必要性を説いた。その翌年に李德懋・柳得恭・徐理修とともに、正祖によって奎章閣の検書官に拔擢される。

朴齊家が二回目の燕行を果たしたのは、乾隆五五年（一七九〇）の乾隆帝の八旬万寿節を祝うための使節で、今回は柳得恭も随行した。今回の燕行では、旧知の李鼎元・驥元兄弟や潘庭筠だけではなく、新たに、四庫全書総纂官であった紀昀や考証学の大家孫星衍、若き日の阮元など、数多くの学者と交流した。^⑩

柳得恭のこの際の燕行録である『溧陽録』には「李墨莊見塘二太史」という詩と注が含まれており、柳得恭と李鼎元との交友の一端を知る事ができる。柳得恭は李鼎元・驥元兄弟について「十余年来便りを交わしており、天涯の旧識である。」^⑪と記すように、実際に会う以前から親しい関係にあった。このように、二人に長年に渡る親しい関係があることを前提に、『燕臺再游録』での問答を見ていく必要がある。

① 『溧陽録』は別名『熱河紀行詩注』とされるが、実際には『溧陽録』と『熱河紀行詩注』の間には、互いに見られない記述がみられる。また、詩のみ編纂された『熱河紀行詩』も存在する。テキストの差異

について詳細は、王振忠『乾嘉時代柳得恭의 中国紀行——哈佛燕京圖書館所藏抄本《冷齋詩集》研究』（『袖中東海一編開——域外文獻与清代社会史研究論稿』、上海、復旦大学出版社、二〇一五年、初出二〇〇八年）参照。

- ② 柳得恭の経歴については、宋寓鎬『柳得恭의 詩文學研究（柳得恭の詩文學研究）』（ソウル、太学社、一九八五年、宋基豪「한국의 역사」——柳得恭（韓國の歴史家——柳得恭）』（『韓國史市民講座』一、二、ソウル、一潮閣、一九九三年、金榮鎮「유득공의 생애와 교육, 年譜（柳得恭の生涯と交遊、年譜）」（『大東漢文學』二七、二〇〇七年）、安大合・王鑫磊『燕臺再游録』復旦大学・成均館大学編『韓國漢文燕行文獻選編』卷二五（上海、復旦大学出版社、二〇一一年）等参照。

- ③ 『四庫全書總目提要』卷首、職名（石家荘、河北人民出版社、二〇〇〇年）。

- ④ 李鼎元の経歴については、はじめに、註⑧夫馬編著所収、村尾進「李鼎元『使琉球記』解題」及び曾煥棋「使琉球冊封正使趙文楷・副使李鼎元について」（清代使琉球冊封使の研究）、榕樹書林、二〇〇五年）参照。『稿紵集』（ソウル、李佑成編『楚亭全集』中「亞細亞文化社、一九九二年）によれば李鼎元は乾隆己巳（一四）年生まれで朴齊家と同じ年である。なお、先行研究では乾隆二五年の挙人となっているが、嘉慶『四川通志』（『中国地方志集成 四川、南京、鳳凰出版社、二〇一一年）卷二九、選舉志八、舉人五によれば乾隆三五年であり、こちらが正しいと考えられる。

- ⑤ 彼は一七六五年に燕行し、北学派のはりりとなった洪大容と交流した人物として知られる。詳しくは、はじめに、註③夫馬著書収録「一七六五年洪大容の燕行と一七六四年朝鮮通信使——両者が体験した中国・日本の「情」を中心に——」参照。

- ⑥ 藤塚鄰著、藤塚明直編『清朝文化東伝の研究——嘉慶・道光學壇と李朝の金院堂』（『国書刊行会、一九七五年 二四頁、孫術国「清嘉慶時期中國士人學術交誼——以朝鮮《韓客巾衍集》之西伝清朝及其関涉之人交往為中心」』（『明清時期中國史學對朝鮮的影響——兼論兩國學術交流与海外漢学』、上海、上海辞書出版社、二〇〇九年）、金允朝「18세기 후반 韓中 文人 交遊 李調元（18世紀後半韓中 文人文交遊と李調元）」（『韓國學論集』五一、大邱、二〇一三年）参照。鄭珉氏は、

李調元が柳琴が自宅を訪問した際に初めて会ったように記したと指摘する。また、柳琴の李調元宅への訪問は、単に序文を求めるためではなく、正祖が購入を指示していた『古今圖書集成』の購入と関係すると推測している。鄭珉「18세기 한중 지식인의 문예 공화국·하버드연정도서관에서 만난 후지쓰카 겐택선（18世紀韓中知識人の文芸共和國・ハーバード・エンチン図書館で出会った藤塚コレクション）」（坡州、문화동네、二〇一四年）二七二―二八二頁参照。

- ⑦ 柳琴の李調元訪問に際しては、経緯ははっきりしないが、李鼎元が何らかの関与をしているようである。註⑥鄭珉前掲著書、二九八―三〇〇頁参照。

- ⑧ 交流の詳細は李德懋『靑莊館全書』（ソウル、ソウル大学古典刊行会、一九六六年）下、卷六七、入燕記参照。

- ⑨ 註⑥藤塚著書、二五頁。

- ⑩ 註⑥藤塚著書、三五―四一頁。

- ⑪ 卷二、李墨莊兌塘二太史「十餘年來信息相聞、天涯旧識也。」「古芸書屋藏」の版心のある韓國国立中央圖書館藏『溟陽錄』（위창古287-19）に基づへ。

第二章 李鼎元と歴代冊封使の波上寺銘文に対する考証

一、李鼎元の琉球冊封使行

乾隆五九年（一七九四）に琉球国王尚穆が薨じ後を継いだ世孫の尚温は、服喪期間を終えたと請封使を送り冊封を請うた。清は嘉慶四年（一七九九）に冊封使の人選を行い、八月に正使に趙文楷、副使に李鼎元が選ばれた。二人は翌嘉慶五年（一八〇〇）二月に北京を出発し、閏四月に福州に到着、五月に出港して琉球に到着し、七月に尚温を冊封、一〇月まで滞在して十一月に福州に帰着した。

琉球への冊封は、往路は夏至以降の南西の風を利用して福州を出発し、復路には冬至以降の東北風を利用して帰還する。そのため、四―五ヵ月程度は滞在しなければならないが、論祭や冊封が終わると特にすることが無かった。このことは考証学の時代を生きた清朝知識人である冊封使にとって研究を深める絶好の機会となり、歴代冊封使の多くは使琉球録を作成した。^①

李鼎元は日記体の『使琉球記』^②六巻や、多くの詩を書いており、その冊封使行について詳細を知ることができる。彼のひとつ前の冊封使であり『琉球国志略』の著者周煌は、同じ四川出身の先輩

であり、冊封使に任命されると真つ先に『琉球国志略』を入手している。李鼎元は、自身の観察や琉球人士から得た情報によって今までの使琉球録の誤りを正すほか、琉球の風俗や動植物について詳しく記しており、使琉球録の出色の作とされている。

また注目されるのは、『球雅』という、『爾雅』に倣った漢琉辞書の作成を行ったことである。彼は、琉球の山川、風俗を採訪したものの、すでに『琉球国志略』に詳しく書かれており、琉球の言葉だけはまだ十分に採録されていないとして、尚温に依頼し、楊文鳳など五人の琉球人の協力を得て『球雅』を編纂した。^③だが、彼が琉球滞在中に心血を注いで作成した『球雅』は、その後行方が杳として知れず、長い間幻の書であった。

そのような中、丁鋒氏が北京図書館所蔵の翁樹崑による鈔本『琉球訳』が、その『球雅』ではないかとの説を提示した。『琉球訳』は訳音、訳訓、訳言、訳天、訳地、訳人、訳数、訳楽、訳宮、訳器、訳山、訳水、訳草、訳木、訳虫、訳魚、訳鳥、訳獸、訳畜の十九門からなっており、『爾雅』の体裁に似ていることや、『使琉球記』内の『球雅』編纂の記録に符合する特徴がみられたためである。^④その後、村尾進氏が柳得恭『燕臺再游録』を用い、李鼎元自身が『球雅』から『琉球訳』にタイトルを改めたことを明らかにした。^⑤

このように、詳細な記録を残しただけではなく、『琉球記』を作成したことから、李鼎元とその『使琉球記』は、研究者の注目を集めてきた。冊封行の詳細については、先行研究を参考にされたい。^⑥

二、波上寺銘文についての考証

先述のように、夫馬氏は李鼎元が『使琉球記』内で行った波上寺銘文の考証を問題にしたが、李鼎元だけではなく歴代冊封使が考証を行い、発展させてきた。本節では、夫馬氏の指摘する、李鼎元を含めた歴代冊封使の波上寺銘文の考証の問題点を確認したい。夫馬氏は、『事実』にこだわる精緻ですぐれた琉球研究をした。清朝考証学者でもあった冊封使たちが、琉球を覆う日本の影を薄々感じ取つていながら、^⑦日本の実質的な支配を受けてきたという「事実」を知りえなかったことを問題にし、その例として波上寺銘文の考証を取り上げた。

波上寺の堂内にある銅製の旛（御幣）の銘文に最初に着目したのは、康熙二十二年（一六八三）に冊封正使としてやってきた汪楫であった。彼は『使琉球雜錄』において、波上寺の銅製の旛の銘文に書かれた「元和二年壬戌」の六字について、意味が分からない、と述べた。ここに書かれた「元和」とは日本の年号であるが、

汪楫が知らぬふりをしていたのでなければ、「元和」は中国では後漢が唐代の年号しかなく、そのころは琉球は中国と朝貢関係に無かったため、何のことかわからなかったのである。この「元和」が日本年号であることを見破ったのが、乾隆二十一年（一七五六）の冊封副使周煌であった。彼は『琉球国志略』で、日本人馬場信武の『八卦通変指南』に見える「上元は永祿七年甲子に始まり、元和九年癸亥に終わる。中元は寛永元年甲子に始まり、天和三年癸亥に終わる。」という箇所を引用し、「元和」とは日本年号であり、これによつて計算すれば元和壬戌とは元和八年（一六二二）にあたり、汪楫が「二年」としたのは、誤りであると指摘した。その後、嘉慶五年（一八〇〇）にやってきた李鼎元は、『使琉球記』の中で、従客から波上寺銘文について質問を受けた際、周煌の考証をもとに馬場の『八卦通変指南』の記述に言及した後、「琉球国では寛永銭が流通しているうえに、元和という日本僧号を用いていることからすれば、琉球がむかしかつて日本に臣属していたことがわかる。今、これを言うのを避けているのだ。」と述べた。^⑧

夫馬氏は、波上寺銘文は正しくは「天和二年壬戌」とすべきところを、汪楫が「元和二年壬戌」と誤ったとの原田禹雄氏の解釈^⑨に対して同意し、干支の世界で生きていた当時の知識人が、馬場

の「八卦通變指南」に「天和三年癸亥」とあるのを引用しておきながら、癸亥の前年が天和二年壬戌であることを指摘していない点に疑問を呈した。もし「元和八年壬戌」の誤記であるならば、明末の天啓二年（一六二二）になるが、「天和二年壬戌」の誤記であるとした場合、清の康熙二年（一六八二）にあたる。つまり康熙二年（一六六三）に冊封して以降、宗主国である清が、琉球が日本の服属下にあつたことを全く知らずに冊封しつづけたことになる。このことから夫馬氏は、冊封使たちが「事実」を知る事を慎重に避けた可能性を指摘した^⑩。

特に夫馬氏が注目するのが李鼎元の記述であり、注意すべき点として二点を挙げる。一つは、「琉球がむかしかつて日本に臣属していたことがわかる。（知琉球舊曾臣属日本。）と、「舊曾」と過去を示す副詞をわざわざ重ねて用い、あくまで過去のこととして処理している点である。もう一つは、「今、これを言うのを避けているのだ。（今諱言之矣。）」という一文について、常識的には、琉球人が日本に服属していたことを言うのを避けていると解釈すべきであるが、「自分も今、これを言うのを避けているのだ」と、言外に意味しているとも取れるという点である。かつて琉球が日本に臣属していたと認めた場合、いつから日本の臣属を離れたのかという問題が生まれるが、李鼎元が「これを言うのを避け

ている」ためである^⑪。

このように歴代冊封使の波上寺銘文の考証には、琉球が日本に属しているという「事実」を知ること避けたと思われる点が見られる。次章では、柳得恭の『燕臺再游録』を用い、李鼎元の実際の認識を検討しよう。

① はじめに、註③夫馬著書所収「使琉球録と使朝鮮録」五五二―五五四頁参照。

② 本書には原田禹雄氏による訳注がある。原田禹雄訳注『李鼎元「使琉球記」、榕樹書林、二〇〇七年。本書には嘉慶七年序の師竹齋原刊本も影印収録されており、本稿ではこれを用いた。

③ 「使琉球記」五月二十九日、および三〇日。編纂過程については、林慶勲「李鼎元撰述琉球寄語研究」（『政大中文學報』二期、台北、二〇一〇年）参照。

④ 丁鋒「琉球訳」解題、校釈与附録凡例（『球雅集——漢語論稿及琉漢対音新資料』好文出版、一九九八年）、および同氏「清李鼎元『琉球訳』所収寄語的漢語対音」（『日漢琉漢対音与明清官話音研究』、北京、中華書局、二〇〇八年）参照。

⑤ 村尾進「球雅」の行方——李鼎元の「琉球訳」と清朝考証学（『東洋史研究』五九（二）、二〇〇〇年）参照。ただし村尾氏は「遼海叢書」所収の『燕臺再游録』を用いているため、再検討が必要な部分もある。

⑥ 第一章註④村尾論考、曾論考、及び Michael Mitsugu Sakthara「Preliminary study of the record of the mission to Liu-Chou by Li Ting-Yuan」（『第三屆中琉歴史関係国際學術會議論文集』、台北、一

九一年）、上里賢一「冊封使の詠んだ琉球——趙文楷と李鼎元を中心」〔第四回琉中歴史関係国際學術會議論文集〕琉球中国関係国際學術會議、一九九三年）、徐玉虎「清冊琉使李鼎元著述遺存琉球考」〔國立政治大學歷史學報〕二、台北、一九九五年）、鄒愛蓮・高煥婷「清代の冊封趙文楷・李鼎元の琉球での冊封活動に関する試論」〔第四回琉球・中国交渉史に関するシンポジウム論文集〕、一九九九年、林慶熙「清代冊封副使李鼎元の琉球文化行脚」〔國立台灣師範大學國文學系系編「紀念瑞安林尹教授百歲誕辰學術研討會論文集（上）」、台北、文史哲出版社、二〇〇九年）、廖肇亨「清代中葉古典海洋詩歌叢探——以嘉慶五年琉球冊封使趙文楷、李鼎元的海洋經驗為中心的考察」〔海洋文化學刊〕第八期、基隆、二〇一〇年）参照。

⑦ たとえば、徐葆光『中山伝信録』、周煌『琉球国志略』では、万曆三十七年に琉球が日本の兵三千人の侵略を受け、国王が囚われたことや、日本の寛永通宝が流通していることを記し、また徐葆光は、琉球で用いられている文字は日本の文字であることを述べている。はじめに、註⑧夫馬論考、iv頁参照。

⑧ はじめに、註⑧夫馬論考、vi—vii頁参照。

⑨ 原田禹雄『汪楫 冊封琉球使録三篇』（榕樹書林、一九九七年）、六八頁参照。より詳しくは、同氏「波上のご神体」〔冊封使録からみた琉球』、榕樹書林、二〇〇〇年、初出一九九七年）。

⑩ はじめに、註⑧夫馬論考、viii頁参照。

⑪ 一九世紀中葉の考証学者兪正燮も、同様の結論にいたりながら琉球がいつからどのようにして日本の臣属から離れたのか、一切考証していない。はじめに、註③夫馬論考、一一五頁、および、はじめに、註⑧夫馬論考、vii頁参照。

第三章 柳得恭と李鼎元の琉球に関する問答

嘉慶六年（一八〇二）四月、柳得恭と朴齊家は北京にやってきた。柳得恭は二回目、朴齊家は三回目の燕行であった。奇しくも、李鼎元が琉球国王の冊封を終え、北京に帰還した後のことであった。

今回の燕行では、柳得恭は『燕臺再游録』を残しているが、朴齊家は燕行録を残していない。しかし、彼の息子である朴長蘅が、父と清朝人士との交流に関する記録を集めて編纂した『縞紵集』があり、一部に朴齊家が行った筆談が収録されている。柳得恭の『燕臺再游録』は、清朝人士との問答に主眼を置いたためか、同行の朝鮮人に対する言及がない。だが、柳得恭が『燕臺再游録』で言及した北京で交流した清人の半数は、『縞紵集』の中に登場する。そのため、柳得恭と朴齊家は行動の多くをもにしていると推測される。

今回の燕行で、柳得恭は朱子の善本を購入することを命じられていた。^①二月一五日に漢城を出発し四月一日に北京に到着すると、柳得恭と朴齊家は翌日直ぐに、旧知の札部尚書である紀昀の元を訪ねた。そこで現在朱子の善本がほとんど売られていないということや、李調元の官を辞した後の成都での暮らし、門人である李

驥元が亡くなったことなどとともに、李鼎元がすでに琉球国王の冊封から帰ってきていることを教えられた。^②

その後二人は李鼎元を訪ねた。^③ 李鼎元は朴齊家に嘉慶四年九月付けで来年琉球に使節として赴くことを手紙で伝えており、李鼎元が琉球に行ってきたことを、北京に来る前から二人は知っていた。外国に対して開明的な北学派の彼らは、琉球にも高い関心を持つており、特に柳得恭は、周煌『琉球国志略』を読んで著作の中でも言及や引用を行っている。^⑤ また、一七九四年に済州島に漂着した琉球人を、正祖の決断により約二百年ぶりに清を経由して陸路送還したことはまだ記憶に新しかったはずであり、冊封使として琉球から帰ってきた長年の友人である李鼎元の見聞には、二人とも高い関心を持つていたと考えられる。そのため、柳得恭は李鼎元に会うと、李調元の安否を尋ねた後に、すぐに冊封使行のことを尋ねている。^⑦

この際のやり取りを、柳得恭の手稿本とされる韓国国立中央図書館本『燕臺再游録』（尊貴古朝90・4、『冷齋書種』第三冊に収録）に基づいて見ていこう。^⑧ この本には書き込みや塗りつぶして削除した部分があるため、文章の推敲の様子が分かる。柳得恭と李鼎元のもとのやりとりを知る上でも重要な史料である。

正使が誰か、琉球までの距離や渡航時の経験、琉球の風俗衣章

の問答の後、柳得恭は李鼎元に以下のように尋ねている。

柳得恭「周侍講の『琉球国志略』のような大作が多い事でしょう。」

李鼎元「この使行では詩三百余首、使録一書その他、『琉球記』一書、上下二巻があります。すでに脱稿しました。詩と使録はまだ清書していません。」

李鼎元「（琉球に）渡海したばかりですが、貴国の文献を得て一書を作り、外藩の第一位としたいです。」

柳得恭「老子は韓非子と同じ伝に立伝されるのを恥じます。」^⑩ 李鼎元は大笑いした。

ここから、二人が会った当時、すでに『琉球記』が脱稿しており、詩集と『使琉球記』が未清書の段階であったことがわかる。また、朝鮮について一書を作りたいと述べる李鼎元に対し、柳得恭は『史記』で同伝に立伝されている老子と韓非子に擬え、琉球と同じにされたくないと述べると、李鼎元は大笑いしている。

その後酒や料理に話題が行った後、李鼎元のほうから、以下のように切り出した。

李鼎元「貴邦はかつて琉球と通商していましたが、後に間隙ができました。今は結局のところどうなのでしょう。」

柳得恭「国初はかれ（琉球）は来貢していました。今は来ていません。別に不和はありません。」

李鼎元「片田舎にあつて小さく、笑うべきです。」

柳得恭「かれ（琉球）は倭子に属しています。万曆中、平秀

吉がその国の王を捕らえて連れ去りました。」

李鼎元「かれ（琉球）は倭子に属しています。このことを、

その国の人が非常に秘密にしていました。だから書き入れかねました。」^⑬

傍線部分は、『遼海叢書』本で脱落している部分である。管見の限り、『遼海叢書』以外の全ての現存鈔本に明記されている。^⑭

前述のように夫馬進氏は、李鼎元は琉球の置かれている現状を知っていたが、柳得恭に直接的に尋ねることはしなかったため、中国の冊封使や考証学者は安定した国際秩序を破壊する恐れがあることから、琉球の現状を知つていても公言したりそれ以上問うてはいけなかった、という説を提示した。^⑮しかし、史料の傍線部分を見ると、李鼎元から朝鮮と琉球の関係を尋ねられた際に柳得恭は、「かれ（琉球）は倭子に属しています。」と述べ、李鼎元は「かれ（琉球）は倭子に属しています。」と、現在琉球が日本に属していることを認めているのである。『使琉球記』で、「琉球がむかしかつて日本に臣属していたことがわかる。」と過去のこと

として述べていたのとは全く違う認識を、李鼎元は持っていたのである。その一方、夫馬氏が指摘した、琉球が日本に属していることを過去のこととする記述は、意図的なものであったことがここから明らかになる。李鼎元は現在琉球が日本に属していることを認識していた。そして、そのことを朝鮮人である柳得恭の前で認めていた。柳得恭が朝鮮と琉球を一緒にしてほしくないと述べたのに対し李鼎元が大笑いしたのは、琉球が日本に属していることを知っていたことも一因であつたと考えられる。^⑯

しかし、柳得恭と会つた時点ではまだ稿本であり、この問答の翌年である嘉慶七年の序文を付して刊行された『使琉球記』では、琉球が日本に属していることに言及していない。李鼎元は、琉球人が必死に隠していたため『使琉球記』には書くことができなかったと述べているが、今後我々は、李鼎元が何を書き、何を書かなかった、あるいは書けなかったのかを考えなければならない。また注意すべきは、李鼎元に朝鮮と琉球の関係を問われる前に、酒を強く勧められた柳得恭はジョークを返すのであるが、この際「一座皆大笑いした。（一坐皆大笑。）」と場が沸いたことを記しており、この問答は李鼎元と柳得恭、朴齊家三人のみというよりは、他にも人が居る場で行われたことが示唆される点である。つまり、限定された場ではあるが、外国人を含んだ複数人の前で述

べており、この場に居る人たちにとっては既知のことであつたか、それを冊封使を経験した李鼎元が発言しても問題にしない人々が集まっていたと考えられる。

時期が少し後になるが、嘉慶一五年（文化七年、一八一〇）に江蘇省に漂着した薩摩漂流民の記録『清国漂流図』によれば、薩摩の漂流民が江南の商店主と筆談した際に、琉球との貿易関係や日本人の琉球居住について問われ、知らないと回答したところ、筆談者側は「嘘をつくのは良くない」と返している^⑤。江南地方は琉球使節が朝貢時に往来する地であつた。琉球が日本に属しているとまで認識していたかは不明であるが、民間人でさえ、琉球と日本の間に深い関係があることを認識していたことが示唆されるのである。

- ① また、当時起きていた白蓮教徒の乱の情報収集も命じられていた。任明杰『「燕臺再遊録」에 나타난 柳得恭의 中国 認識 研究——「熱河紀行詩註」와 의 비교를 통하여——』、『燕臺再遊録』に現われた柳得恭の中国認識研究——「熱河紀行詩註」との比較を通して」（『세국어교육』一〇四、ソウル、二〇一五年）参照。
- ② 紀昀との筆談は、問答の順番や量は違えど奇妙なことによく似た文章が『燕臺再遊録』と『縞紵集』に、紀昀と柳得恭二人による筆談、紀昀と朴齊家二人による筆談として、それぞれに収録されている。柳得恭と朴齊家両方が筆談を残している相手としては、他に李鼎元・陳鋠・曹江がいるが、それぞれの筆談内容は全く異なっている。紀昀と

の筆談を比較すると、文量は同じ程度であるが、①表現が異なったり発言者が異なる部分がある、②片方にしか収録されていない問答が存在する、③問答のトピックの順番が両者では異なる、という点が確認できる。そのためこの筆談を史料として用いるに当たっては慎重な検討が必要である。

- ③ 李鼎元が朴齊家の死後に息子の朴長範に当てた手紙では、琉球からの帰国後、朴齊家と柳得恭に琉球廠で会ったことを記しており、少なくとも一度は三人で会っている（『縞紵集』下、李鼎元、附小箋）。
- ④ 『縞紵集』下、李鼎元、次修先生。確認はできないが、柳得恭にも手紙が送られていた可能性も考えられる。
- ⑤ 『京都雜志』（京城、朝鮮光文会、一九一一年）巻二、歳時、元日で、正月の遊びである板跳びが琉球にも存在していることを、『琉球国志略』を用いて言及している。また清・日本・安南・琉球人の詩を集めた『並世集』（一七九六年序、韓国国立図書館所蔵著者手稿本『冷齋書種』（尙貴古朝90・4）第一冊所収）巻二にて、出典を明記してはいないが、程順則の「東海」（正しくは「東海朝暉」、蔡文薄『呈冊封天使』の詩を載せている。この二詩は『琉球国志略』に掲載されており、ここから引用されたと考えられる。また、『琉球国志略』は李德懋や李書九も家蔵していた。『承政院日記』正祖二十年六月一九日参照。
- ⑥ 詳細は、はじめに、註④夫馬論考、一三四—一三六頁参照。
- ⑦ なお、『縞紵集』にはこの燕行時の朴齊家と李鼎元の筆談が収録されているが、琉球については言及されていない。
- ⑧ 本書は復旦大学文史研究院・成均館大学東亜學術院大東文化研究院合編『韓國漢文燕行文獻選編』巻二五に影印収録されている。
- ⑨ 版心下部に「古芸書屋」とあり、柳得恭の号のひとつが「古芸堂」であるため、全てが親筆ではないものの、柳得恭の直接の編集下で作

成されたものとされている。国立中央図書館本『冷齋書種』解題（한국고전종합목록시스럼）（韓国古典籍総合目録システム）、http://www.nl.go.kr/koris/search/ChoRok.php?rec_key=10111598&title=E6_B3_A0_E9_BD_8B_E6_9B_B8_E7_A8_AE&author_info=E7_A7_89_E5_BE_97_E6_81_AD_E8_91_97_1101（一六〇一年五月二三日アケス）参照。筆者が確認したところ、この中央図書館本で行われた修正は、現存する『燕室再遊録』諸本に反映されていた。諸本の関係は稿を改めて論じる。

- ⑩ 問「想多大作如周侍講『茗』」答「此行有詩三百餘首、使錄一書外、有『琉球譯』一書、上下二卷、已脫略。詩・錄尚未清出。」墨莊曰「吾新渡海、欲得貴國文獻勒成一書、爲外藩冠冕。」余曰「老子羞與韓非同傳。」墨莊大笑。

- ⑪ 墨莊曰「貴邦曾與琉球通商、後成隙。今究如何。」余曰「國初伊來貢。今不來。別無嫌隙。」墨莊曰「僻小可笑。」余曰「伊屬倭子。萬曆中、平秀吉掣他國王去。」墨莊曰「伊屬倭子。此事、其國人甚秘之。故不便入紀矣。」

- ⑫ 現存鈔本と遼海叢書本の問題点については、別稿にて詳しく論じる。はじめに、註③夫馬論考、一一六―一七頁。

- ⑬ 李鼎元の琉球に対する評価は、朝鮮に比べると非常に低い。『使琉球記』七月二三日では、「この国の書物はほとんどと少なく、中国から購入するものも多くない。そのため文風は朝鮮に及ばない。（本国文籍固少、即購自中國者亦不多。故文風不及朝鮮。」）と述べている。また、朴齊家の哭文を贈った際に「一緒に朝鮮使節に贈った『附面嶽將東歸詩以贈之 并求指政』（『縞紵集』）下、李鼎元」では、「琉球から帰ってきて朴（齊家）と柳（得恭）に会い、中山の醜さを話しくした。箕子はめぐみを三千年残し、（朝鮮の）教化は外蕃の上位であるということ以上のものである。（歸來治逢朴與柳、爲余說盡中山

醜。箕子遺澤三千秋、文教豈惟外蕃右）」と、琉球を非常に低く、反対に、朝鮮を非常に高く評価している。数十年來朝鮮人士と交流し朝鮮を高く評価してきたことが、琉球に対する低い評価にもつながっていると考えられる。

- ⑮ 劉序楓「清代における日本人の江南見聞——薩摩船の漂流記録『清国漂流図』を中心として——」（川勝博士記念論集刊行会編『川勝守・賢亮博士古稀記念 東方學論集』、汲古書院、二〇一三年）八四二―八四三頁参照。

第四章 沈黙と暗示——『使琉球記』と『琉球訳』

前章で見てきたように、李鼎元は、琉球が日本に属していることをはっきりと認識しており、そのことを冊封国朝鮮の使者でもある長年の友人柳得恭たちの前で認めていた。当時の江南の一人も、琉球と日本の間に深い関係があることを認識していたことから、琉球が日本に属していることは、清では知る人は知る公然の秘密であつた可能性が考えられる。

しかし、このことは、琉球が日本に属していることを清の中で公言できたかどうかとは、また別な問題であると考えられる。李鼎元は『使琉球記』には記していないため、夫馬氏が指摘したように、やはり公言できるものではなかったと考えられる。

李鼎元は、柳得恭から共通の友人で詩人として有名な翰林院檢討張問陶が来ない理由を問われた際、「人の多くは『私交之議』

がないように気をつけています。私のようなものは功名富貴に汲々としてないので、天に任せて交友できるのです。」と述べるように、外国人である朝鮮人と付き合うことで疑惑が生じるかもしれないことを気にしない、名利に恬淡としたところのある人間だった。朴齊家は彼の人となりを詩の中で、「驕らないし、また媚もしない。処世の態度は自然に従っている。」と述べている。柳得恭が料理に出てきた野菜を詳しく尋ねて本草好きを發揮した際には、「天下の一物一状、自分で見たのであれば、妄りに議論すべきではありません。」と述べており、自分で確認していないものを妄りに語るべきではないと考える人間であった。また、李鼎元と交友を持った朝鮮人徐澄修は、「李墨莊伝」で彼の人となりを以下のように描写する。

墨莊の人となりは剛直であり、飲酒が好きで放言を好んだ。そのため世間と齟齬を来たし、功名は思うに任せなかった。そのため世間と齟齬を来たし、功名は思うに任せなかった。
(中略) 評するに、墨莊は雨村（李調元）の弟で、科擧上位合格して翰林畑を歩き、時の名士であった。かつて聞いたことには、柳彈素（柳琴）と筆談した際、慷慨不平の語が多く、傍らに忌諱を犯すのを戒める者がいたので、墨莊が奮然として書き示すことには、「頭を切るなら、すぐに切れ。わたしは言うべき話なら、言わないでいられるだろうか。」思

うにこれを見てその人を知るべきである。^⑤

柳琴と交流した若い頃のエピソードではあるが、剛直で大胆なところがあり、忌諱に触れるようなことはつきり言う人間であったことがわかる。彼の豪胆ぶりは、冊封からの帰路海賊に襲撃された際に、兵士を指揮して撃退したエピソードからも伺える。このような人物であったからこそ、李鼎元は長年の友人である朝鮮人の柳得恭の前で、琉球が日本に属している事実を認めることができたと考えられる。その一方、このような人物である李鼎元が、琉球が日本に属していることを知りながら、『使琉球記』に書けなかったことは、琉球側が隠していたからという彼の説明よりは、それほど清の中では公言できないことであつたからだと考えた方が自然であろう。特に彼は天子の代わりに琉球国王を冊封してき

た身であつたため、尚の事、沈黙するしかなかった。
しかし、『使琉球記』では琉球が日本に属しているという事実には言及できなかったものの、『琉球訳』の中では暗示しているのではないかと思われる点がある。現存する『琉球訳』は北京図書館所蔵の翁樹崑による鈔本と、中央研究院所蔵の鈔本があるが、そのどちらでも、訳地第五に含まれる「琉球」を指す琉球語（現代沖縄語の発音では「Pulinnaal」^⑥）を音写した部分で、「琉球曰倭急拿」と漢字で転写している。「倭急拿」を漢字の音ではなく、

意味で理解すれば、「倭が急いで捕らえた」とも読めるのである。

もともと「倭急拿」という漢字を当てるのは、琉球が日本の侵略を受ける以前である嘉靖一三年（一五三四）の冊封使陳侃の『使琉球録』が「琉球人」にあたる琉球語（Pucinaahwitu）を「倭急拿必周」と音写したのが始まりであるが、「琉球国王」という語（Pucinaaganan）は「倭急那敖那」と音写している。語彙内の「琉球」にあたる部分が「倭急拿」として共通に表記されるのは、嘉靖四〇年（一五六一）の冊封使郭汝霖の『重編使琉球録』が初めてあり、その後の使琉球録でも継承されてきた。^⑩しかし、あくまで語彙の一部分の表記であり、琉球語の仕組みがわからない読者が、「琉球」≡「倭急拿」と呼ぶと認識したとは考えづらい。冊封使ではなく、国子監の琉球官学教習であった潘生が、乾隆帝から琉球国の語音を尋ねられたことに答えるため作成した『琉球入学見聞録』^⑪（乾隆三十九年・一七六四年序）の土音では、「国王曰倭急拿敖那」とし、また「琉球曰烏吉逆呀」と、全く別な漢字を用い音写している。

「琉球」という語それ自体で語彙を取り上げて「倭急拿」という漢字を当てたのは、『琉球記』が初めてである。このような音写になったのは、あくまで偶然の産物であったと考えられる。しかし、漢字の国の人である李鼎元が、音写した漢字の意味すると

ころを全く意識しないでいたとは考えづらい。この奇妙な事実との符合をもって、読者に琉球と日本の関係を暗示しようとしたのではないだろうか。^⑫

① 人多持無私交之議。如我不汲汲於功名富貴、可以任天而游。

② 『貞蕤閣集』（李佑成編）『楚亭全集』中、ソウル、亜細亜文化社、一九九二年）貞蕤閣三集、「懷人詩 仿蔣心餘」李墨莊「墨莊吾同庚。

纔過強仕年。自云世間事。漸覺不如前。不驕亦不媚。行藏隨自然。」

③ 天下一物一狀、非親見、不可妄議。

④ 實際には従兄弟である。

⑤ 徐澄修『明阜全集』（『韓國文集叢刊』二六一、ソウル、民族文化推進會、二〇〇一年）卷一四、李墨莊伝「墨莊爲人骯髒、喜飲酒好放言。

以故與世醜陋、功名蹉跎。（中略）評曰、墨莊以雨村之弟、擢高第歷翰苑、爲時名流。嘗聞與柳彈素筆談、多慷慨不平之語、而傍有戒其觸犯忌諱者、則墨莊奮然書示曰「研頭便研頭。自家合說底話、便不得說」。蓋觀乎此而其人可知也。」

⑥ 『使琉球記』十月二十九日。

⑦ 『國家圖書館藏琉球資料匯編』下（北京、北京圖書館出版社、二〇〇〇年）所収。

⑧ 中央研究院傅斯年圖書館所藏。（A 4325.046 v.1、及び v.2）

⑨ 丁鋒氏は、北京圖書館本と中央研究院本を比較すると、北京圖書館本の方が誤字・脱字が多いこと、また中央研究院本の筆跡と李鼎元の筆跡を比較すると一致しないため、中央研究院本が李鼎元の親筆とは断定できないことを指摘している。第二章註④、丁鋒「清李鼎元（『琉球記』所収寄語的漢語対音）二九四—二九五頁参照。

⑩ 国立国語研究所『沖繩語辞典』（大蔵省印刷局、一九六三年）参照。

以下の琉球語の発音も本辞典を参照にした。

- ⑪ 琉球語語彙の音写の変遷について詳しくは、丁鋒「明会同館編《琉球館訳語》的漢語対音」、及び同「明代四種《使琉球録・夷語》的漢語対音」（『日漢琉漢対音与明清官話音研究』、北京、中華書局、二〇〇八年）参照。なお、郭汝霖『重編使琉球録』の現存鈔本はいつ鈔写されたものか不明であるため、留意が必要である。

- ⑫ 註⑦、同書所収。

- ⑬ 偶然の産物であるこの暗示は、琉球と日本との関係に疑念を持った人しか引っかけを覚えない消極的なものであろう。「倭が急いで捕らえた」という歴史的事実を想起させることで、ではいつ琉球が日本から解放されたのか、今の関係はどうなのか、という問いに発展させるものである。

おわりに

本稿では柳得恭の手稿本『燕臺再游録』を用い、嘉慶五年（一八〇〇）の琉球冊封使李鼎元の琉球に対する認識を検討し、李鼎元が琉球が日本に属していることを認識していたこと、そして、『使琉球記』の中でその事実を公言できなかったことを明らかにした。

李鼎元が冊封に行った時代、すでに東アジアでは、琉球が日本に臣属していることを前提にして国家間の関係ができていた。この安定した関係を維持するため、琉球や薩摩は、清に対し日本と琉球の関係の隠蔽に努力してきたが、琉球・薩摩側の努力だけで

はなく、李鼎元のような日本と琉球の関係に気づいた清人が沈黙することで、当時の東アジアにある四国の関係は成り立っていたのである。

ところで、柳得恭と朴齊家は、まだ稿本であった『使琉球記』を読ませてもらっているが、李鼎元との問答と『使琉球記』の記述を通し、清朝内で琉球が日本に属している事実を公言できない状況を、はつきりと理解したのであろう。特に柳得恭は周煌『琉球国志略』を読んでおり、琉球と日本の関係を理解していた朝鮮人の彼ならば、その中で言及された波上寺銘文の日本年号の考証に關して、すぐに年号の誤りと、現実を直視することを回避しようとするような記述に気が付いていたであろう。そもそも、琉球が現在も日本に属していることを先に言及したのは柳得恭の側であり、^②彼はこの事実を述べることで、清側がどこまで琉球と日本の関係を認識しているのか探ろうとしたと考えられる。彼はこのように探りを入れることで、微妙なバランスで成り立っている東アジア四国の関係の実態を、知ろうとしたのである。

① 『燕臺再游録』内で『使琉球記』を読んだことは明記されてはいないが、柳得恭は李鼎元の「過海図」に詩を寄せたことを記している。この詩中にある「姑米村娘呈板舞。彩毫題偏竹枝歌。」という句は、『使琉球記』九月一日にある「踏板戲」のエピソードと、『師竹齋集』巻一三に収録された「和寄鹿竹枝詞十首」のことと考えられるこ

とから、柳得恭は『使琉球記』を読んでいたと考えられる。また朴齊家も、「過海図」と同一のものと考えられる李鼎元の「琉球奉使図」に、「題李壘莊琉球奉使図」という詩を作っている（『貞蕤閣集』貞蕤閣四集、及び『縞紵集』上、李鼎元。詩中の「偶問簪纓知漢姓。閒尋款識辨倭年。」とは、『使琉球記』七月三日の、琉球にはもともと姓はないというのは本当か尋ね、閩人三十六姓の子孫である久米村人のみ姓があることを教えられた箇所、および八月二五日の波上寺銘文の年号について従客から質問を受けた箇所を詠みこんでいると考えられる。

② ただし、『燕臺再游録』の記述内容が、実際の筆談の順番通りに収録されているという前提が成り立つならである。第三章註②にて指摘

したように、紀昀との筆談部分は、実際の筆談内容の順序を変更して収録している可能性が考えられるため、李鼎元との筆談内容の順番も実際の筆談から変更されている可能性が否定できない。しかし、紀昀との筆談では個々の問答のトピックの順番や語句は変わっているが、問い、答えの順番や問答の主旨は変わっていない部分がほとんどのため、李鼎元との問答も、記述通り柳得恭の方から切り出したものであると考えられる。

【付記】 本稿はJSS科研費13062の助成を受けたものです。

（京都大学人文科学研究所共同研究員）

Therefore, the two cooperated closely thereafter. Aehrenthal concentrated more attention on the problem of the Habsburg constitution rather than the reaction of the European powers. He aimed to pass an annexation law that was founded on the Habsburg's succession law (in German, Pragmatische Sanktion) in the Austrian and Hungarian parliaments. However, on this occasion, Hungarian Prime Minister Sándor Wekerle claimed Hungary's historic rights in Bosnia-Herzegovina on the basis of the Habsburg's law of succession. Aehrenthal and Austria Prime Minister Max Wladimir Beck opposed Wekerle's assertion as groundless. They could not find a way to settle the disagreement, and in the end the annexation law was never established.

The content of my analysis may be summarized as follows: (1) We should not overestimate Burián's role in the annexation attempt, but his memoranda not only stimulated leading circles of the Habsburg Empire to consider annexation but also helped matters develop more smoothly in Vienna after the revolution of the Young Turks. As Burián himself later wrote, we should regard him as the true proponent of annexation. (2) As we have seen in the examination of the annexation law, the decision-making process for imperial affairs was very complicated and lacked a coordinating function. A full account of annexation reveals the pluralistic and inefficient policymaking of the Habsburg Empire.

The Investiture Envoy Li Ding-Yuan's Perception of Ryūkyū
from Yu Deuk-gong's Manuscript Version of *Youn Dae Jae*
You Log and International Relationships among
Qing, Ryūkyū, Japan and Joseon

by

KIMURA Kanako

After the invasion by Satsuma, a Japanese feudal domain, Ryūkyū was able to maintain its monarchy. Concealing his relationship with Japan, Ryūkyū received investiture 冊封 from the Qing recognizing its tributary status. Satsuma helped in this concealment. Joseon, likewise a vassal state of

Qing, had known Ryūkyū was a subject of Japan through Joseon's embassies to Japan.

However, the relationship between Ryūkyū and Japan was not revealed and did not become a subject of discussion in the suzerain state, Qing. Investiture envoys who came to Ryūkyū sensed the shadow of Japan but did not investigate or report this to the Qing Court. One example is the problem of Japanese era name inscribed on Gohei 御幣 of Naminoue temple 波上寺 in Ryūkyū. Even though that Japanese era and zodiac signs did not coincide with each other, investiture envoys could not correct it. If they were to correct it, the fact that Qing had granted investiture even though Ryūkyū was a subject of Japan would also come to light. Therefore investiture envoys cautiously avoided dwelling on that fact.

In relation to this problem, the example of Li Ding-yuan 李鼎元, the investiture envoy in 1800, deserves attention. After he went back to Beijing, he met Yu Deuk-gong 柳得恭, an envoy from Joseon, and they discussed Ryūkyū. The content of their discussion appears in Yu Deuk-gong's *Youn Dae Jae You Log* 燕臺再游錄. Yu mentioned that the king of Ryūkyū had been captured by Hideyoshi Toyotomi, but Li did not respond and unnaturally allowed the dialogue on Ryūkyū to conclude. Therefore, it is said that Qing diplomats and scholars were vaguely aware of the relationship between Ryūkyū and Japan but did not to refer to it or ask openly about Ryūkyū's status.

However, it has now been discovered that the text of the *Youn Dae Jae You Log* used in previous studies differs from Yu Deuk-gong's manuscript version. In the manuscript version, it is recorded that they discussed the fact that Ryūkyū was a subject of Japan. Li Ding-Yuan knew this, but in his record as investiture envoy, *Shi Liu Qiu Ji* 使琉球記, he made no mention of it. It is now clear that he was unable to record it. In this period, the relationships between Qing, Ryūkyū, Japan and Joseon were formed on the premise that Ryūkyū was a subject of Japan. Stable relationships among these countries were maintained not only by the efforts of Ryūkyū and Satsuma to conceal their relationship but also by people, like Li Ding-Yuan of the Qing, who kept their silence.